

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：32616

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25560306

研究課題名(和文) 小学校における「体育の学力(技能、態度、思考・判断)」把握についての研究

研究課題名(英文) A research on the achievement level of elementary school physical education

研究代表者

細越 淳二 (HOSOGOE, Junji)

国土館大学・文学部・教授

研究者番号：70365526

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：主な成果は以下の通りである。小学校4年生のマット運動の技能については、「前転」「後転」の達成率は75%以上であったが、「側方倒立回転」は39.0%にとどまっていた。6年生の走り高跳びは、男女ともに70%以上の達成度を示していた。ペーパーテストの結果からは、4・6年生ともに70%以上の正答率であった。態度面については、体育授業に対する態度や授業中の行動について、意識と行動の間に差異が認められた。等の具体的事実が確認された。

本研究で設定した方法を用いた調査の結果から、現行の学習指導要領下における小学校4・6年生段階の学習状況の一端を具体的なデータをもって明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：Main results as follows; At the results of apparatus gymnastics, we got three findings mainly, the achievement rate of a forward roll and a backward roll were over 75%, and the cartwheel was 39.0%. The achievement rate of the papertest of 4th and 6th grades were over 70%. On the attitudes toward physical education classes, we found the some gaps between their consciounss and their behavior during PE classes.

From these results, we could grasp the current conditions about achievement rates of course of study on physical education in elementary school level.

研究分野：体育科教育学

キーワード：小学校体育 体育の学力 技能、態度、思考・判断

1. 研究開始当初の背景

近年、学力に関する国際調査が実施され、わが国の子どもの学力、言い換えれば教育の成果と課題が社会的なトピックスとなっている。国内でも子どもの学力についての実態把握および成果検証が行われている。そのような中、現行の学習指導要領改訂に関わる論議では「確かな学力」の定着が大きな課題とされた。また次期の改訂に向けては、学校教育が21世紀を生きる子どもたちにどのような資質・能力を身に付けさせるべきなのか、またそれをどのように習得させるのかについての見通しを明らかにすることが求められている。

では学校体育に目を向けたとき、これまでの学校体育は、子どもたちにどのような力を保障してきたのだろうか。子どもの体力レベルについては「新体力テスト」の結果をもって議論が行われることも多いが、学習指導要領に示された各運動領域の技能(運動)や態度的側面、思考・判断面を直接的な対象にしたエビデンスは、さほど多くが得られているとは言えない現状がある。それらを評価する尺度および到達基準を、我々はまだ十分に有していないように思われる。より望ましい教育課程の策定と確かな成果の導出方法を検討するにあたり、このことについて精緻な取り組みをすることが喫緊の課題であると考えられる。すべての学年や領域のそれらについて、評価の方法も含めて更に検討を進める必要がある。

文部科学省は、次期学習指導要領の内容に関するエビデンス収集の取り組みとして、平成25年度に「学習指導要領実施状況調査」を実施した。体育も今回は調査対象隣、現在、その結果公表を待つ段階にある。しかしこの調査は無作為抽出による調査であるため、より多くの児童を対象とした調査を行うことから、現行の学習指導要領のより確かな定着度を明らかにするとともに、これからの教育課程編成に対するエビデンス作成を同時進行で進めることが必要である。

2. 研究の目的

このような問題意識から、本研究では、小学校における「体育の学力(技能、態度、思考・判断)」に関わって、学習指導要領に記載された内容についての学習状況を把握する方法を設定し、子どもたちの「体育の学力」に関する実態を調査することを目的に設定した。

3. 研究の方法

(1) 対象

現行学習指導要領から提唱されている「4-4-4」の枠組みを適用して、小学校4年生段階、加えて小学校修了段階として小学校6年生を対象にした。

(2) 調査方法

現行の学習指導要領では、各学年で学習する内容が「技能(運動)」「態度」「思考・判断」の3つの枠組みで示されている。本研究ではこの枠組みを用いて、技能については実技調査、技能に関する知識および態度、思考・判断についてはペーパーテストを実施してその実態を明らかにしようとした。

実技調査について

小学校4年生段階では、体づくり運動領域の「多様な動きをつくる運動」、器械運動領域の「マット運動」「鉄棒運動」「跳び箱運動」、ゲーム領域の「ゴール型ゲーム」「ベースボール型ゲーム」を取り上げて、学習指導要領解説体育編に例示された項目を対象にした。小学校6年生では器械運動領域の「鉄棒運動」「跳び箱運動」、陸上運動領域の「走り高跳び」、ボール運動領域の「ベースボール型」を取り上げて、同様の実技調査を実施した。

分析については、それぞれ取り上げた運動についての観察的評価基準を設定してその達成度を測る、あるいは例示された動きの出現頻度やその成功回数等をカウントすることから実態把握をしようとした。

ペーパーテスト及び意識調査について

運動学習に関する思考・判断及び運動についての知識については、ペーパーテストを作成して、その正答率から学習状況を把握しようとした。4年生・6年生ともに18項目の設問を用意した。評価方法については、各設問に得点を配するのではなく、テスト項目に対する正答数をカウントすることとした。

また態度面については得点評価に向かない内容があるとして、体育授業に対する意識調査項目を設定してその実態を知ろうとした。

4. 研究成果

ここでは主な研究成果を示すことにする。

実技調査の結果について

実技調査についてであるが、まず小学校4年生を対象としたマット運動(対象児童413名)の結果を見ることにする。ここでは学習指導要領解説に示された「前転」「後転」「側方倒立回転」を取り上げて調査を実施した。

「前転」が滑らかにできている子どもは、全体の368名(89.1%)であった。「後転」は316名(76.5%)、「側方倒立回転」は161名(39.0%)という結果であった。このことから、「前転」「後転」については70%以上の達成率が得られていたことがわかった。しかし細部を見てみると、「後転」では「回転後、両手でマットを押してしゃがみ立ちになっているか」という項目は、その達成度が245名(59.3%)であったことから、この学年段階でのつまずきの様子が明らかになったといえる。また「側方倒立回転」は、倒立位を経過する運動であることから、この学年段階

の子どもたちにとっては経験度の問題も含めて、達成できていない技であることがわかった。

次に小学校6年生を対象にした「走り高跳び」の結果をしてみる。ここでは164名(男子84名、女子80名)を対象にして調査を実施した。

リズムカルな助走から踏み切り、はさみ跳びで足から着地できているかをチェックしたが、全体的にスムーズな動きができていた児童は、男子で61名(72.6%)、女子が63名(80.8%)であった。このことから、男女とも70%以上の子どもが走り高跳びの一連の運動経過を身に付けていることが確かめられた。

ペーパーテスト及び意識調査の結果について

全18問のうち、4年生は全体で78.2%の正答率を得ていた。詳細を見ると、「走・跳の運動」「ゲーム」「浮く・泳ぐ運動」領域の正答率はそれぞれ83.5%、80.0%、94.0%と高かった。各項目の結果を見ていくと、「体づくり運動」領域で、運動とその目的の組み合わせを回答する問題は、正答率が低くなっていたことが特徴的であった(正答率はそれぞれ66.0%、51.0%)。

6年生は全体で73.0%の正答率を得ていた。詳細を見ると、「ボール運動」領域や「水泳運動」領域の正答率はそれぞれ86.0%、82.5%と高かったが、「体づくり運動」領域で、運動とその目的の組み合わせを回答する問題、「器械運動」領域で、運動課題をクリアするための解決方法を選ぶ問題は、正答率が低くなっていた(正答率はそれぞれ54.0%、26.0%)。これは体育授業にける指導の結果を示しているようにも思われた。

また態度面に関わる意識と行動の一致度を知ろうとした設問では、例えば「体育学習で運動に進んで取り組むことは大切だと思うか」「体育学習で運動に進んで取り組んでいるか」という問いに対しては、全社で「はい」と回答した子供は4年生で76%、6年生で74%であったのに対し、後者で「はい」と回答した子どもは4年生で47%、6年生で42%と減少する様子が認められた。

「体育の学習で約束を守り、友達と助け合って運動することは大切だと思うか」「体育の学習で約束を守り、友達と助け合って運動しているか」という問いについては、前者で「はい」と回答した子どもは4年生で81%、6年生で82%であったが、後者で「はい」と回答した割合は4年生が48%、6年生が50%にとどまっていた。

本研究の結果から、現行の学習指導要領下における小学校4年生及び6年生段階の学習状況の一端を明らかにすることができた。また態度面に関する意識と行動のギャップについても明らかにすることができた。

今後、体育授業においても、運動学習に関

する知識が一層、重要性を増してくるものと思われる。本研究で適用した手法を用いながら、さらに詳細な調査分析を行い、エビデンスに基づいた教育課程の策定に資する取り組みを継続する必要がある。今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

高田彬成・森 良一・山口 香・渡邊正樹・細越淳二：体育科における「態度」の指導と評価の現状と課題、初等教育資料、査読無、No.938、2016、46-53

細越淳二：運動が苦手な子どもも上達！みんな楽しい教具の工夫！！～投げる・捕る動きを中心に～、楽しい体育の授業、査読無、第29巻第3号、2016、6-9

細越淳二：体育授業を通じた学級づくり・学年づくり～新年度の体育授業に向けて～、中学保健体育科ニュース、査読無、No.1(2016年3月)2016、2-4
佐々木浩・須甲理生・細越淳二・金沢翔一：体育授業における教師の授業力向上に関する実践的研究—小学校教師2名のマット運動の授業(4年生)を対象にして—、体育授業研究、査読有、第18巻、2015、1-10

細越淳二：よい体育授業と学級の成長、体育科教育、査読無、第63巻第4号、2015、26-29

細越淳二：「できる わかる かかわる 体育授業」の実現に向けて～運動のよさを考え子供の姿をイメージする～、埼玉教育、査読無、No.774、2015、4-5

[学会発表](計1件)

小久保英・細越淳二：小学校体育における「デジタル教科書」作成の試み-ネット型ボール運動をとおして-、日本スポーツ教育学会第35回記念国際大会、2015年9月20日、日本体育大学(東京都・世田谷区)

[図書](計4件)

細越淳二：スポーツ関係法規にみるスポーツ概念、中村敏雄・高橋健夫・寒川恒夫・友添秀則(編集主幹)21世紀スポーツ大事典、大修館書店、2015、15-16

細越淳二：体育科教育からのアプローチ、入澤充(編著)体育・部活動指導の基本原則、エイデル研究所、2015、34-45

体育授業研究会(編)細越淳二他：よい体育授業を求めて、大修館書店、2015、56-66、272-287、288-299、301-303

池田延行・岩田 靖・日野克博・細越淳二：体育科教育別冊 新しい走・跳・投の運動の授業づくり、大修館書店、2015、4-10

[産業財産権]

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

細越淳二 (HOSOGOE, Junji)
国土館大学・文学部・教授
研究者番号：70365526

(2)研究分担者

白旗和也 (SHIRAHATA, Kazuya)
日本体育大学・体育学部・教授
研究者番号：20515184

(3)連携研究者

()
研究者番号：

(4)研究協力者

()
研究者番号：